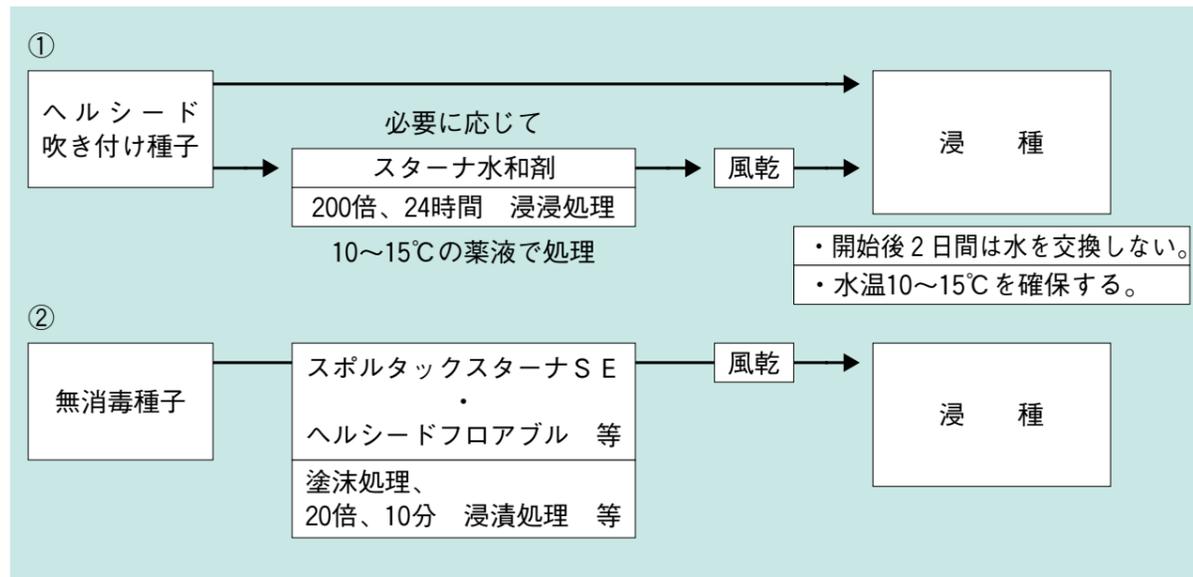


薬剤吹き付け種子消毒のポイント

薬剤吹き付け種子は、種子表面に付着した薬剤が浸種後水に溶け出し、種子に吸われることで効果を発揮します。

- ① 浸種に使う水は水道水または地下水を使用してください。
- ② 薬液濃度を保つため、浸種開始時の水量は、種子容量の2倍程度とします。
(種籾1kgに対し水量3.5ℓ)
- ③ 種子周辺の薬剤濃度を高めるため、浸種開始後は種子袋をゆすったり、水のかけ流し、循環や交換をしません。
- ④ 浸種開始後2日間以上水を循環させません(ハトムネ催芽機を使用する場合も水の循環をさせません)。
- ⑤ 浸種水温を10~15℃に保ちます。
- ⑥ 水温が10℃を下回る時は浸種開始から水の交換までの期間を延長します。

薬剤による消毒方法



採種圃場周辺での注意点

採種圃は皆様へ健全な種子を届けるため、非常に細やかな管理で作付けされています。ばか苗病が周辺で発生し、採種圃へ飛散すると、種子として認められなくなりますので、採種圃周辺に水稻を作付けする方は以下の点に留意し、ご協力いただきますようお願いいたします。

- ① 水稻採種圃には看板が設置されています。この圃場より500m以内にばか苗病発病株があれば採種できません。
- ② 採種圃周辺では、化学合成農薬による種子消毒を行います。
- ③ 水稻育苗中の苗にばか苗症状を確認したら、直ちに営農センターへご連絡下さい。
- ④ 田植え後にばか苗症状を確認したら、直ちに営農センターへご連絡下さい。

ばか苗病を増やさない管理の徹底を!!

発行/秋田おぼこ農業協同組合・仙北農業共済組合

ばか苗病対策特集号

3月より始まる春作業に向けて、ばか苗病を増やさないポイントについて特集いたします。

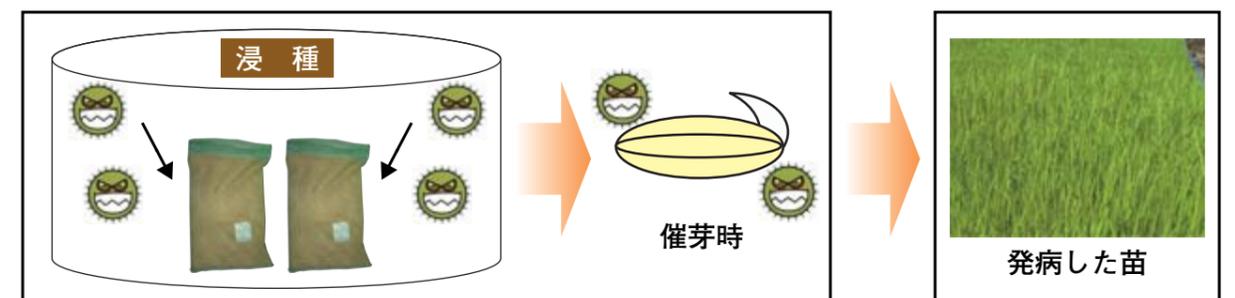
温湯種子・薬剤吹き付け種子共通の注意点

以下のポイントに注意し、春作業を迎える準備をしましょう。

- 1) 浸種~催芽場所の近くに籾殻やゴミがないよう、清掃しましょう。
- 2) 浸種~催芽までに使う資材を清掃または消毒しましょう
- 3) 浸種~催芽はきれいな水で行いましょう。
- 4) 品種や消毒法の異なる種子は別々に浸種~催芽しましょう。
- 5) ハトムネ催芽機を使用する場合、浸種中は水の循環をしないようにしましょう。
- 6) 催芽は30~32℃で行います。長期間の催芽や、無加温出芽での長期被覆は、ばか苗病の発生を助長させるので避けましょう。
- 7) 保温資材は気温の変化を見て使い分けるようにしましょう。
 - ① 保温系シート：低温時の保温効果があるが高温時には温度が上がりやすい傾向がある。
 - ② 反射系シート：高温時の急激な温度上昇を和らげる。低温時は温度が下がりにくい傾向がある。
 - ③ 不織布シート：育苗箱の下敷きとして使用。被覆材としての効果が低いため単独での使用しない。

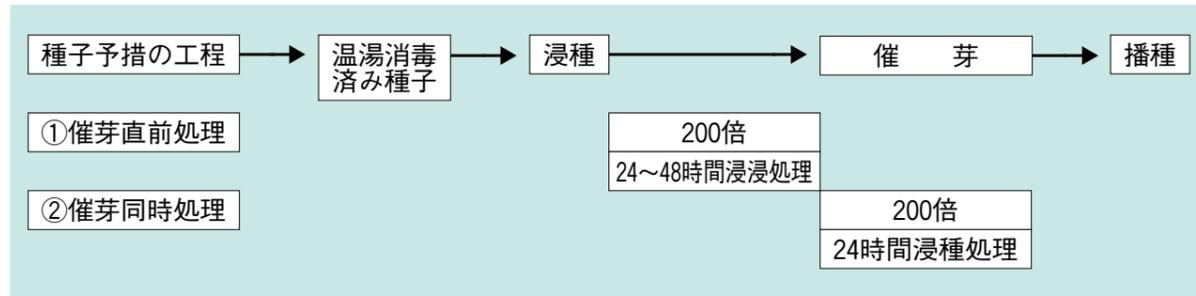
ばか苗病が発生するまで

・ばか苗病は浸種から催芽の間に伝染します。



生物農薬（タフブロック）の上手な使用方法

○処理方法の手順



① 催芽直前処理の場合

浸種の最後の水替え後の水に希釈します。水量に対して200倍に希釈し、薬剤を十分攪拌します。

その後、種籾を投入し、よくゆすります。

種籾と薬液の容量比は1：1以上で行います。

例) 水量20Lに対してタフブロック100g投入

水量100Lに対してタフブロック500g投入

処理後は液を攪拌せず、種籾をゆっくり取り出します。

② 催芽時処理の場合

タフブロックの200倍液で催芽します。

ハトムネ催芽機の場合は、循環を停止後、しばらく静置します。

催芽後、芽が傷まない程度の乾燥は問題ありません。(脱水機の使用も問題ありません)

③ 播種後の管理

出芽時および育苗初期の間は10℃以下の低温を避け、温湯消毒や生物農薬の防除効果を高めるよう、温度管理を徹底してください。

他薬剤との併用について

タフブロック処理をした場合、以下の薬剤との併用には注意して下さい。

区分	薬 剤	注 意 事 項
種子消毒剤	ヘルシード剤 テクリード剤	併用できません。
	スターナ水和剤	併用できます。
土壌消毒剤	ダコニール剤 ダコレート剤 ベンレート剤	播種時処理との併用はできません。
	タチガレン タチガレエースM	併用できます。
	箱処理剤	
箱処理剤	嵐 剤 オリゼメート剤 バイゲット剤	床土混和处理あるいは播種時処理との併用はできません。 併用できます。

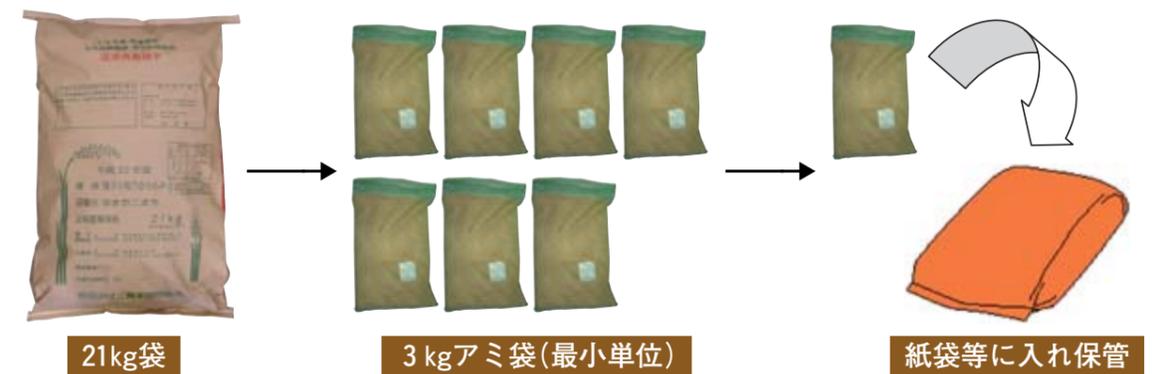
殺虫剤との併用は問題ありません

温湯消毒種子の留意点

温湯消毒種子は無菌状態で出荷されるため、周辺環境に影響されますので以下の点に注意してください。

保管管理上の留意点

- ① 作業場・小屋の籾殻・稲ワラ・ゴミ等を掃除しましょう。
- ② 保管は清潔なパレット等で行います。
- ③ 種子袋は浸種準備ができてから開封します。
- ④ 温湯消毒種子は1袋当たり21kg袋での販売となります。そのため、3kg単位の端数で購入された方は、購入後、清潔な紙袋等に入れて保管して頂くようお願いいたします。



浸種・催芽時の留意点

- ① 浸種オケはゴミやホコリの少ない場所に設置しましょう。
- ② 浸種はきれいな水で行い、こまめに水交換します。
- ③ 一時保存する場合もパレット等清潔な場所で行います。
- ④ 生物農薬（タフブロック）との組み合わせにより防除効果の向上を図ります。
- ⑤ ハトムネ催芽機を使用する場合は、**浸種期間は水を循環させず、催芽時にタフブロックを使用します。**



出芽時の留意点

- ① 出芽時および育苗初期の気温が10℃を下回ると温湯消毒や生物農薬の防除効果が低下する場合がありますので温度管理を徹底してください。
- ② 温湯消毒種子は芽の動きがやや早まる場合がありますので、催芽に注意します。

タフブロックについて

タフブロックは、ばか苗病菌よりも先に種子表面で増殖して病原菌の侵入を防ぎます。



写真1 もみ表面に定着した
タラロマイセス菌コロニー